会員のページ

★海の森・里海シンポジウム in Kagoshima

鹿児島藻場造成研究会と全日本漁港建設協会，鹿児島県漁港建設協会の主催により，「海の森・里海シンポジウム in Kagoshima —藻場を守り育てる海づくり港づくり—」と題したシンポジウムが，2009年10月29日に鹿児島市の城山観光ホテルで開催されました。

鹿児島県内では，関係各位の普及活動によって藻場の重要性が広く一般社会に認識されつつあります。しかし，一般の方や港湾整備に携わる民間企業の方が海藻・海草類についての基礎的な知識を学ぶ場は，決して十分でありませんでした。このような背景から，藻場の保全や再生に関する産官学の勉強会「鹿児島藻場造成研究会（野呂忠秀会長，鹿児島大学水産学部長）」が活動を開始し，シンポジウムを約2年に1度の間隔で開催してきました。

近年，地域社会によって生態系が支えられている「里山」的な考え方が沿岸域に当てはめられ，「里海」という新しい言葉で提唱されています。今回は，藻場を里海生態系の中心と捉え，守り育てるために必要な技術開発や環境整備のあり方について議論しました。藻類学会の会員としては，藤田大介さん（東京海洋大学）が「藻場を守り育てる海と港」と題した基調講演をされると共に，寺田（鹿児島大学）が九州における藻場の現状を報告しました。九州南部では，磯焼けや亜熱帯性種の増加など，藻場生態系の急激な変化が問題になっています。また，埋め立て等によって失われた藻場や干潟も多く，環境に調和した社会基盤整備や藻場の保全が求められています。

パネルディスカッションの様子

本シンポジウムは，藻場の現状と課題を再認識し，産官学それぞれが求められていることを考えるよい機会となりました。藻場を地域社会共有の財産と捉え，漁業者や住民の方々

が主体となった藻場再生への取り組みも始まっています。研究者の側としては，試験研究の成果をいち早く社会へ還元する姿勢が益々求められているのかもしれません。

会場には，鹿児島県内外より約300名の方々が参加され，遠くは東京や青森県から来られた方もいました。ご参加下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

（寺田竜太）

★海藻標本のご寄贈に感謝（科博，TNS）

国立科学博物館大型藻類標本室（TNS，つくば市）は，海藻押し葉標本の寄贈を歓迎（詳細は55巻2号本欄）しておりますが，2009年11月に下記の方から貴重な標本を寄贈していただきましたので，この場をお借りして御礼申し上げます。池原宏二先生（川口市）より，日本列島沿岸流れ藻標本を1,175点。1982年から1996年にかけて日本各地の沿岸で採取された流れ藻です。

（北山太樹）

賛助会員

全国海苔貝類漁業協同組合連合会（〒272-0014 市川市田尻3-4-1）

有限会社浜野顕微鏡（〒113-0033 東京都文京区本郷5-25-18）

株式会社ヤクルト本社研究所（〒186-8650 東京都国立市谷保1796）

神協産業株式会社（〒742-1502 山口県熊毛郡田布施町波野962-1）

理研食品株式会社（〒985-8540 宮城県多賀城市宮内2-5-60）

マイクロアルジェコーポレーション株式会社（〒500-8148 岐阜県岐阜市曙町4-15）

株式会社ナボカルコスメティックス（〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-29-7）

日本製薬株式会社ライフテック部（〒598-8558 大阪府泉佐野市住吉町26）

共和コンクリート工業株式会社（〒060-0808 北海道札幌市北区北8条西3丁目28 札幌エルプラザ11階）

（株）環境総合テクノス（〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町1-3-5）

（株）日本港湾コンサルタント（〒651-0084 兵庫県神戸市中央区磯辺通3-1-2 第三建大ビル10階）

編集後記

本号から，大会プログラム中の講演者所属別注番号がアスタリスクから数字表記になりました。最近の発表は，共同研究者が増える傾向にあります。研究者が10名前後で構成されるような発表もあり，「*」だけでも数十字分を占めていました。星の数のような「*」が数字になり，要旨がとても見やすくなりました。この要旨集を手に，つくば市でお会いできることを楽しみにしています。

（寺田竜太）

原著論文，記事，書評等，ご投稿をお待ちしております。